

ペンから 剣へ

—学徒出陣 70 年—

この画像は著作権の
関係で表示できません。

1945年4月24日、市島保男が鹿屋
基地付近で摘んだレンゲの花

2013年3月25日発行

2013年度春季企画展
ペンから 剣へ
—学徒出陣 70 年—

(非売品)

編集・発行

早稲田大学大学史資料センター

Waseda University Archives

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町513

Tel: 03-5286-1814 Fax: 03-5286-1815

URL: <http://www.waseda.jp/archives/>

©2013 Waseda University Archives.

2,500部 不許複製

この画像は著作権の関係で表示できません。

2013年度春季企画展
ペンから剣へ
 —学徒出陣70年—

はじめに

今年、いわゆる学徒出陣から70年にあたる。

太平洋戦争が敗色の様相をみせる1943年10月、学徒に認められていた徴兵猶予が停止された。これにより陸海軍へ入隊した学徒数は全国で9万、あるいは13万と言われ、早稲田大学からは4500名を越す学徒が出陣した。すでに1941年から繰上げ卒業が実施されており、翌44年には徴兵年齢が下げられるとともに、第二陣の学徒が出陣していった。その年の秋、学生の消えた早稲田の光景を、文学部の女子学生だった堂園満枝は32文字に詠んだ。

征く人の ゆき果てし校庭に 音絶えて
 木の葉舞うなり 黄にかがやきて

今回の企画展では、学業半ばで陸海軍に入隊し、戦場に逝った5人を取り上げる。彼らの知性は戦争の時代といかに向き合い、格闘したのだろうか。彼らの軌跡を追うことから戦争の姿を改めて問い直し、不戦の誓いを新たにしたいと思う。

2013年3月

早稲田大学大学史資料センター

※展示期間中、展示品の入れ替えなどを行う場合があります。



早稲田大学 出陣学徒壮行会
 1943年10月15日 大学史料センター所蔵

一 遺書・最後の手紙

高木多嘉雄

1922年1月8日	東京府生
1939年3月	東京府立第九中学校卒業 (現・東京都立北園高等学校)
1940年4月1日	第二早稲田高等学院入学
1942年4月1日	早稲田大学政治経済学部入学 (1944年9月25日卒業)
1943年12月1日	東部第六部隊入営
1944年5月1日	前橋陸軍予備士官学校入校
1944年9月17日	第十四方面軍教育隊転属
1944年11月11日	フィリピン・マニラ着
1945年1月31日	見習士官任官
1945年2月18日	第十四方面軍教育隊卒業 第十九師団転属
1945年3月30日	フィリピン・ルソン島キャンガンにて戦死



遺書

1944年9月

家族宛 新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

遺書

日本に生を稟け此所に二十三年。

始めて日本本土を離れ、米軍撃滅の為出発す。

米軍の勢力極めて大なり。故に何時敵の洗礼を受くるやも知れず。此所に日頃の修養を述べて遺書となす。

生れて現在迄常に暖き父母の慈愛のもとに純に成育し、今日迄深く感謝の日を送りぬ。然れども戦運我に利非ずして学校中途にして南方に向はんとす。

我性来温順なりと雖も常に心の奥深く考へ、今日の幹部候補生を見るに、誠に員数に等し、之を脱すべく自己修養に努め自らの矜持を持ちたり。即ち我の如き幹部候補生に非ずば将校たるの資格なしと。

斯に我は日本の将来を憂ふ。即ち日本に優秀なる中堅幹部の余りに少き故になり。然れども現在之を悲感する時ならず、宜しく良き指導のもとに優秀なる幹部を養成すべきなり。

斯く考へ自己の責務の重大なるを思ひ、真に皇国に奉ずるの時至るを思ひて喜

なり。この体力と気力とを持ちて益々努力、幹部候補生の模範たらんとす。愈々殉国の時に於て父母に潔く現在迄の不孝を許して戴くと共に、散りゆく若木を立派に見送って下さい。

自分は長男として常に不孝ならざる如く注意し成育し来る共、無理を云ひて困らせる時もあり。今此所に別れるに当り二度見る能はざるを思ひ、深く詫びる次第なり。例へ我死すと雖も高木家を立派に残し、益々隆盛ならしめて下さい。自分は始め家を思ひ、国を思ひて非常に悩む。然れども国を憂ふる切なれば、国建てて家あり、依つてこの国難に方り此の一身を捧げて国に尽し、輝しき将来を見出さんとす。

父、母様共に御壮健にされ、残る良治、照子、美子を指導しつつ、自分の立派なる手柄を待って居て下さい。

柳田喜一郎

- 1921年11月11日 東京府生
この間不詳
- 1942年10月1日 早稲田大学商学部入学
- 1943年12月1日 東部第六十三部隊入営
- 1944年5月1日 前橋陸軍予備士官学校入校
- 1944年9月17日 第十四方面軍教育隊転属
- 1944年11月11日 フィリピン・マニラ着
- 1945年1月31日 見習士官任官
- 1945年2月18日 第十四方面軍教育隊卒業
第百三師団転属
- 1945年4月10日 フィリピン・ルソン島サラクサクにて戦死



最後の手紙

1944年9月25日

家族宛 大学史資料センター所蔵

拝啓

箱崎神社に啓で、外敵撃滅を誓ふ。

省みるに武人として淡々たる心境にて出陣する時、自ら烈々たる敢闘の熱血が全身に漲るを覚ゆ。武者振ひと云ふが、誠に決死の状況に臨むとき自づと全身打震ふものである。

博多にて東京の思影を忍び、思ひのまゝに飲み食ひせるも、腹ふくるに至るとき、故郷我が家のことが必々と胸中にこたへ来て、わびしさ限りなし。

前橋の生活は悪夢の一駒としか思はれぬ。然し常に念頭にありありと光り輝くものは、我が家に在りし日の事どもなり。父の姿、母の姿、毎朝夢醒むるとも脳裏に浮かぶなり。二十有余年の間、誠心を持ちて我を育て給へる親の思の如何に尊きものなるかは云ふに及ばざるも、父に報ゆるの吾が努力の小さき事のみ、我が胸を締めつけるなり。父母よ、許し給へ、吾れ何等為す無くして出で立つとは。

然し吾は帝国軍人として一劔、以つて国家の干城と為り、君に忠節を尽し奉らん。吾任務本分に唯一路邁進せんのみ。忠孝一本を吾が信念となし、潔ぎよく征くなり。

伊勢の大廟、榎原の宮に吾が決意を誓ひしより、早や一年なり。秋晴れの神域

を母と肩をならべて歩みし事は今尚ほ記憶新なり。奈良の三笠山に登り、遙かに東大寺の本堂を眺め、昔の栄華を語り、或は清水寺に平安神宮に昔の宮人達の優美な姿を語り合ひし事等、母の姿に結びつき、次々と思ひ出さるなり。

榛名山、相馬ヶ原、雨に煙る日、面会に来れる人々の顔が一つ一つ印象的に浮んでくる。出発の前日、父と別れし時の思ひ、特に深きものあり。

然し今は唯々明鏡の如き清明淡々たる心境なり。
思ひは多けれど、今は一切を滅す。「心頭を滅すれば火も亦涼し」と云ふ。偉大なる神を信じ、運命に身を委かせ、大海に乗り出ださんとするなり。

然し、然し、吾は父母の絶大なる恩愛を滅す能はず。
何よりも吾は父母の慈愛を信ず、是れ神を信ずるに何等異なるなし。
父母への絶対感こそ、神への帰依なるを悟れり。偉大なるは父母の恩愛なり。
吾は是を信ずればこそ、勇躍難に赴き得るなり。真理とは何ぞ。主客統一せる調和の状態なり。感性、悟性、理性を綜合調和せるものは是れ真理なり。是れを父母の恩愛に対する絶対感に吾々は見出せり。
日本皇道の哲理は忠孝一本を前提となし、真理を父母と其の子弟との間に於ける主客合一にこそ求むべきであらう。

シンガポールへ、或はマニラへ、南の国へ吾は行くなり。夢の国へ。何処へ行くとも吾は忘れじ懐しの我が家を。父母よ、吾れを忘れ給ふな。
身はたとへ消ゆるとも、吾が心は必ず父母の許へ駆け戻らん。

千軍の戦なりとも言挙げせて 取りて来ぬべき男ぞと思ふ

綿々たる私情に捉はれ、斯迄書き来れど、我は青年武士たるを思ふ時、余りにも言葉多きを恥かしく思ふ。母に甘へし意久地なしの青年武士と笑ふて下さるな。今は皇国の一武士なり。銃を荷ひ、腰に日本刀をたばさみ、眼鏡を吊り、颯爽と行進する吾等の英姿を想像し給ひ。

では、元気に頑張り、青年武士の名を恥づかしめざらんことを期す。
出陣の日 喜一郎 不一

吉村友男

1922年3月1日 岐阜県生
1940年3月 東海中学卒業（現・東海高等学校）
1941年4月1日 第二早稲田高等学院入学
1942年10月1日 早稲田大学文学部国文科入学
1943年12月1日 中部第四部隊入営
1944年5月1日 中部軍教育隊入隊
1944年9月 第四航空軍司令部転属
1944年10月18日 フィリピン西方海上にて戦死

この画像は著作権の関係で表示できません。

最後の手紙（断簡） 1944年9月頃
姉宛 わだつみのこえ記念館所蔵

貯金通帖は現地へ持って行っても役にたゝぬので、家へ返すつもりでしたが、考へて、姉上にさし上げる事にします。たゞし、注文があります。
この金は、美学、美術関係の書物を買ふ時のみ使ふ事。
僕の意味するところ、解ったであらう。
少しはまとまった金故、考へて、いゝ本を買って勉強してくれたまへ。そして、この金で買った本には、記念のため、その旨記してをいってくれ。ガイセンして、その本を（以下欠落）

近藤清

1920年8月27日 岐阜県生
 1940年3月 岐阜市立岐阜商業学校卒業
 (現・岐阜県立岐阜商業高等学校)
 1940年4月1日 第二早稲田高等学院入学
 1942年4月1日 早稲田大学商学部入学
 (1944年9月25日卒業)
 1943年12月10日 大竹海兵団入団
 1944年2月1日 第十四期飛行専修予備学生として
 土浦海軍航空隊へ配属
 1944年5月25日 出水海軍航空隊へ転属
 1944年9月28日 名古屋海軍航空隊へ転属
 1944年12月25日 海軍少尉任官
 1945年4月28日 神風特別攻撃隊第三草薙隊員として沖縄海上にて戦死

この画像は著作権の関係で表示
 できません。

遺書

1945年4月

平井しげ宛 近藤幸義氏所蔵

姉上様

加藤三郎少尉はじめ諸先輩に続ける日が近くに参りました。
 闘志満々その好機を待って居ります。
 こちらに来て早速出撃の筈でしたが、不覚や今日まで生きのびて了ひました。
 永い間随分可愛がって戴いて本当に感謝して居ります。
 この度東京で佐野さんと一緒に色々お世話になった市川八百蔵氏(新鋭歌舞伎)
 の娘さんが岐阜に疎開されてこられたそうです。
 この娘さんは姉妹二人、下の妹さんで会社の都合でこの妹さん(せい子さん)
 一人が来られたので寂しがって居られるさうです。……
 せい子さんがお一人で寂しいことでしょうか、◎御不自由のないやう出来る
 かぎりのことはして上げて下さい。私は最後の最後まで姉さんには御無理言ひ
 ますが、よろしく願ひ致します。

皆様の御多幸を祈ります。
 つた子、ちゑ子、久子、照ちゃん、仲よく元気でやりなさい。……
 では元気で征きます。

近藤少尉

姉上様

市島保男

1922年1月4日 神奈川県生
 1940年3月 神奈川県立横浜第二中学校卒業
 (現・神奈川県立横浜翠嵐高等学校)
 1940年4月1日 第二早稲田高等学院入学
 1942年4月1日 早稲田大学商学部入学
 (1944年9月25日卒業)
 1943年12月10日 武山海兵団入団
 1944年2月1日 第十四期飛行専修予備学生として
 土浦海軍航空隊へ配属
 1944年5月25日 谷田部海軍航空隊へ転属
 1944年12月25日 海軍少尉任官
 1945年4月29日 神風特別攻撃隊第五昭和隊員として沖縄東南海上にて戦死

この画像は著作権の関係で表示
 できません。

遺書

1945年4月20日

両親宛 馬越千鶴氏所蔵

父上 母上

思へば廿四年間、私の如き至らぬ者を比すべきものもなき大なる愛情を以て育んで下さった御恩、何と御礼してよいかわかりません。苦勞を御掛けし通して何にも報ゆる事の出来なかつた事を何卒御許し下さい。
 併し此の上なき御両親、弟妹に囲まれ、美しき青春を送った保男は実に幸福者でした。
 今、国の危難に臨み身を以て護国の鬼と化する時、祖国の栄えを願ふ外、思ひ残す事は何もありません。
 御両親から頂いた儘の清い身心をその儘大君に奉り、桜花と共に南海の空に美事咲きます。
 私の身体は粉となるも精神は永久に生き、すべての人の魂に甦へります故、御両親も笑って私の出陣を送って下さる事と固く信じてをります。
 今や生に何等の執着もなく、只使命の完遂を祈る静かなる心境は我ながら不思議な位です。
 立派な御両親に応はしき子として最後を飾るべく全身全霊を挙げて努力します。
 有り難う御座居ました。征きます。

市島保男

御両親様

二 ワセダでの日々

① 1937年7月盧溝橋事件を機に始まった中国との戦争は果てしない泥沼の戦いとなり、「非常時局」の下、文教政策においても戦時体制の推進が要請されるようになった。早稲田大学では田中穂積総長の指揮により、訓示、科外講義、映画上映、神社参拝、慰問、恤兵金など、戦時国策に直結した時局認識と戦意昂揚の育成を熱心に推し進めていった。1940年には国是即応・体力錬磨・集団訓練を綱領とする学徒錬成部を設置し、新入生に向け智徳体兼備の人材錬成をはかったが、これは文部省に設立される国民錬成所の先駆けとなった。

② 高木多嘉雄、近藤清、市島保男は1940年に第二早稲田高等学院に入学した。市立岐阜商業出身の近藤は全国中等学校野球大会で優勝と準優勝の経験をもつ、注目のルーキーだった。敬愛する岐阜商の先輩松井栄造の後を追って野球部に入った近藤は、1942年春季の東京六大学リーグ戦で4割2分5厘の打率をたたき出し、慶應の別当薫に続く2位の好成績を収めた。続く秋季リーグでも打率3割6分8厘の成績を残し、六大学リーグを代表する選手へと成長していった。

市島は文学を愛した。勉学に勤しむ日々を送るとともに、航空部に所属しグライダーに乗った。友と語り、映画を楽しみ、旅をした。学院2年時に、日本基督教団桜教会で洗礼を受けた。「本来の人間の醇美を得んと思えどその難きに逢着して行き悩みあり。ここに於いて始めて神という意識の生じ来れる也」、市島は信仰の芽生えをこのように日記に書いた。

市島保男「学園風景」

1940年5月

「青空と緑の木木に引き立てられているクリーム色の近代的な建物大隈講堂の時計塔、美しい鐘の音、これらは全て我らが学園の象徴である。そしてこの学びの殿堂には、万余の若人が青春を謳歌しているのだ。我ら学生は社会の闘争に対し準備し、亦現実に激しくぶつかって行こうとしている。そしてそこに貴い火花—生命の燃焼—が生ずるのである。生命の燃焼、これは人が真面目な態度でぶつかっていく時に生ずるのであって最も真摯な生活態度なのである。そのときそこには明るい未来が開ける。そしてこの機運が学園に漲ったとき、目には見えないが最も素晴らしい風景が展開されるのだ。」（「市島保男遺稿集」）



市島保男 馬越千鶴氏所蔵

[展示資料]

近藤清「夏休の日記」

1936年7月20日～8月31日 近藤幸義氏所蔵
岐阜商業2年生時の「夏休の日記」。甲子園制覇へと至る日々の練習と、甲子園での試合にのぞむ心情が綴られている。

第二十二回全国中等学校野球大会優勝メダル

1936年8月 近藤幸義氏所蔵

近藤清「アルバム 早稲田大学時代」

近藤幸義氏所蔵

1942年秋季リーグ優勝記念盾

1942年 近藤幸義氏所蔵

早稲田大学学帽 市島保男着帽

馬越千鶴氏所蔵

この画像は著作権の関係で表示
できません。

近藤清 近藤幸義氏所蔵

市島保男「妄言」

1942年4月

「……友は大きく笑いながら銅像を見上げた。大隈さんは相変わらず虚空を見つめている。僕も大隈さんの顔をジッと見た。大きな口は堅く閉ざされ静かな陽光が斜め後ろから注いでいる。何万もの先輩が、中には偉大な先輩が青雲の志を抱いてこの像を眺めたことだろう。しかし時代は変わり、人も変わり、今我々が彼を仰いでいる。彼は変転極まりない時代の潮流も知らぬげに現在ここに立ち、またどれほど長く、そして激しく青年—我々の後輩—の心に何物かを呼び起こさんとするのだろうか。……」（「市島保男遺稿集」）



三 学徒出陣

① 1943年9月21日、東条英機内閣は国民動員徹底の一環として、学徒の徴兵猶予停止を決定、10月2日公布の勅令で、満20歳に達している学徒は徴兵検査を受け、12月早々に陸海軍へ入営・入団することが決まった（大学学部学生の場合、1920年4月2日～1923年12月1日生まれの者が対象）。早稲田の場合、徴集延期となった理工学部などの学生を除き、その数4500名を超え、文科系4学部では7割近くの学生が対象となった。

高木多嘉雄は政治経済学部3年となった。とにかく勉学に励んだ。一方で剣道をはじめ、水泳やスケートも楽しむなど、文武両道の学生生活を送っていた。学徒出陣が決まった時、神風が吹くことを信じていた父に、高木は大学生が行っても誰が行っても、勝てる戦争ではないと言った。

吉村友男は10月、文学部国文科2年に進んだ。読書に親しみ、文芸評論や小説の創作も手掛けていた。羽仁五郎の『クロオチェ』を読み、感銘した。「自分の学問を信じあくまで現代を批判」するイタリアの哲学者B.クローチェに、学者としてのあるべき姿勢を見たのである。

[展示資料]

文部次官「在学徴集延期停止に関する件」

早稲田大学総長宛 1943年10月2日 大学史資料センター所蔵
勅令第755号在学徴集延期臨時特例、および陸軍省令第40号昭和18年臨時徴兵検査規則にもとづいて、文部省は各官公私立大学（総）長等に通牒を發し、徴兵署開設は1943年10月25日から11月5日までとし、徴兵検査は本籍地で行うことを伝えた。

文部次官「昭和十八年臨時徴兵検査を受くべき学生生徒の取扱に関する件」

早稲田大学総長宛 1943年10月19日 大学史資料センター所蔵
入営・入団の学徒に対しては、1944年9月卒業見込みの者に1943年11月卒業証書を授与し、翌年9月に卒業させることとなった。

菊池豊三郎文部次官「朝鮮人台湾人学生生徒に関する件」

早稲田大学総長宛 1943年10月30日 大学史資料センター所蔵
10月20日陸軍省令第48号で朝鮮と台湾に本籍を持つ学徒の特別志願兵制度が定められた。「内地人学生生徒と同様の取扱をなさんとする趣旨に有之……朝鮮人台湾人学生生徒に対しては自ら進んで洩れなく志願する様御懇願相成度」とある。

教練検定合格証明書 高木多嘉雄

1939年3月3日 東京府立第九中学校配属将校陸軍歩兵大佐
新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

第一学年・第二学年野営演習計画

1942年 新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

南軽井沢教練場での野営演習計画書。

早稲田大学政治経済学部学徒国民貯蓄組合同規約

新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵
第一条に「本組合は国民貯蓄の重要性に鑑み、全学一致して戦時貯蓄の実行に力め学徒として財政経済的方面より大東亜戦争完遂に協力するを以て目的とす」とある。



中央後ろが高木多嘉雄
新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

高木多嘉雄筆記 政治経済学部講義ノート

新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

徴集延期証書 高木多嘉雄

新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵

早稲田大学学生証 1944年度 吉村友男

わだつみのこえ記念館所蔵

この画像は著作権の関係で表示できません。

吉村友男書翰 家族宛

1940年9月 わだつみのこえ記念館所蔵

「……上京して来た日に、ちょっと淋しくて泣けたが、ここに移ってからは山地もゐるし、よく眠ります。それに、少しなれて落ちついて来ました。自分の家が如何にいいかは、石で叩かれた様によく解ったし、家に居た自分が如何にルーズで我まま勝手であったかも反省できた。小生、これから少し方向転換するつもりです。海に出てみて、はじめて陸の有りがたさが解る様なものだ。道を歩んでみると、「そうなのよ。」とか、「よしてよ」とか、「ね、さうなんですネ」とか、びっくりする程キレイな言葉を使っているの、どんな上品な小供かと思って振り返ると、なに、きたない小僧で、馬鹿らしいと云ふよりシャクにさはって来る。

昨日と一昨日、銀座へ出たが、昨日などはえらい人出だった。今思ひ出したが、戦争といふ意識がちっとも起らなかった。あ、そうだ、日本は今、戦争中だと思ふ。……」

吉村友男書翰 家族宛

1941年4月2日 わだつみのこえ記念館所蔵

「昨日早稲田発表之れあり、合格仕りました。……東京外語はだめでありました。しかし、まけおしみのやうであります。やっぱり大学をでておらねばはなしならず、兵役の方もそんであります。それに闊といふものがありまして就職の方も、ワセダの方がよいのであります。……これからは、専門学校ではだめで、大学をでなければ上にたてません。名古屋高商や名古屋高工などへは行って、早稲田よりえらいように、名古屋の人はおもってますが、それはおおまちがひだとわかりました。……」

吉村友男書翰 家族宛

1941年4月 わだつみのこえ記念館所蔵

「……みなさん元気ですか。

早稲田の学生になって、もう一週間たちました。新しい帽子や、てさげカバンや、あみあげ靴などで、このごろはすこしばかりワセダニアンらしくなったやうです。……新聞にも出たやうに、今年から新体制で授業は午前四時間だけ。午後は特修科といって、自分の好きなものを自由に研究するといふ仕組みです。教練は一週に二時間、火曜日の午後であり、水曜日の午後に、一時から五時頃まで練成といて、二里もはなれた東伏見といふ山の中へ電車で行って、運動や草とりをするのですが、聞いたところは、いかにも結構なことですが、実際はみんな嫌がってます。教練はどこの学校へいってもやること故、仕方ありませんが。……」

吉村友男 羽仁五郎『クロオチエ』（1939年）を読んで

「クロオチエの偉いところは、学問を信じ多くの人のために尽すということを考えていたことだと思います。学問の独立という言葉があるけれどもそれに徹するということはたいへんむずかしいことだと思います。クロオチエという人はほんとうにそれを信じそれを守った人でした。平和な時は空論も空論と見えないものだから、学問の独立というような言葉もずいぶん繁昌したけれども、現代のような異常な時代になると、空論なんか出る余地がなくなり、みんなあまりそういうことを言わなくなりました。もともと本気で言っていたわけではないでしょうからあたりまえだけれど、たいへん情けないこ

とだと思います。

クロオチエの偉いところは、その議論というより、そういう時代にもなお、ビクともしない彼の学問的信念だと思います。」（『新版 きけ わだつみのこえ』）

②10月15日、早稲田から出征する学徒のための壮行会が、戸塚道場（現・総合学術情報センター）で開催された。立ち並ぶ学徒たちを前に田中穂積総長は、「今こそ諸君がペンを捨てて剣を取るべき時期が到来した」と訓示した。壮行会終了後、出陣学徒たちは各学部ごとに報国碑まで行進、さらに1000名の学生が靖国神社、皇居まで行進し、敵の撃砕を誓った。



早稲田大学出陣学徒壮行会終了後、
学内を行進する早大生
1943年10月15日
大学史資料センター所蔵

翌16日には早慶壮行野球試合、いわゆる最後の早慶戦が催された。直前まで開幕が危ぶまれていたが、戸塚道場は早慶の学生で埋め尽くされた。近藤清は3番レフトで出場し、3打数2安打2打点の活躍で勝利に貢献した。1943年に入り、東京大学野球連盟が解散に追い込まれても、近藤は「野球道」の精神に則り、対外試合はなくとも日々練習に励んでいた。そして5月の松井栄造の戦死に際しては、岐阜の恩人に「必らず仇をとります」と書き送っていた。



「最後の早慶戦」記念撮影 於戸塚道場
1943年10月16日 大学史資料センター所蔵
前列右から7人目が近藤清

田中穂積早稲田大学総長 出陣学徒壮行会に於ける訓辞

1943年10月15日 於戸塚道場

「今こそ諸君がペンを捨て、剣を取るべき時期が到来した……征け諸君！悠久限り無き時の流れの上から見れば誠に信長の歌った通り、人間僅に五十年、……大君の御楯となって、興亜の大業に参加し、その礎石となると云ふことは、誠に価値高く意義深き事柄であって、私は諸君の勇戦奮闘、武運の長久を心から念願し、他日諸君が勝利の栄冠を戴いて再び学園に還る日を鶴首して待つものであるが、併し乍ら、勇士は出陣に当って固より生還は期すべきでない。……」（『早稲田学報』1944年1月号）



早稲田大学出陣学徒壮行会 1943年10月15日 大学史資料センター所蔵

[展示資料]

西条八十「全日本学徒の出陣を送る」

『蠟人形』1944年1月号 大学史資料センター所蔵

当時早大教授だった西条八十は、出陣していく学徒たちに詩を送った。

「……見よ凄凉として血潮流るる南北の空、大東亜十億の民族の運命を岐つ世紀の決戦は迫れり。解放か、奴隷か、楽園か、牢獄か、今にしてこの回天の聖業を支へ得るはたゞ若く、逞しき者の腕のみ。 卿等、皇国の明日を担ふペンを抛げ、書を閉ぢて、奮然、今日のために剣をとる、すなはち腕を敲いて叫ぶ、『我等起たずして、誰人か世界の正義を支ふる？』 ああ、よきかな、この誓、これぞ、猛然太平洋を席卷する昭和の神風ならずして何ぞや。往け雄々しの若人、断じて苟且の生死を意とする勿れ、……」

③10月21日、文部省学校報国団主催で出陣学徒壮行会が明治神宮外苑競技場で開催され、東京およびその近県の2万5000人と推定される出陣学徒が集結した。スタンドには推定6万5000人の送別学生が見守り、東条英機首相らが壮行の辞を述べた。式典の後、早大隊の中からは「都の西北」の合唱がわき起こり、スタンドから女子学生が隊列に駆け寄る光景が見られたという。

市島保男はこの壮行会に行かなかった。その理由を友に次のように書いた。「何

故学生のみがこれほど騒がれるのだ。同年輩の者は既に征き、妻子有る者も続々征っている。我々が今征くのは当然だ。悲壮だということか。では妻子有る者は尚更だ。学生に期待する故と言うのか。では今迄不当な圧迫を加え、冷視し、今に至り一変するとは」。

10月25日からの徴兵検査が迫る中、学生たちはそれぞれの故郷に戻っていった。名古屋へ帰る吉村友男は東海道線の道中、富士山がよく見えたもののミカンの販売がなかったことをもじり、「富士（不死）は見事に見え申し、ミカン（未還）は一つもこれ無きとは、何たる上ゑんぎに候か！お察し願ひたく候」と姉に書き送った。

学徒出陣の発表で慌ただしく過ぎ去る日々の中、最上級生は11月30日付の仮卒業証書を受け、学徒たちはそれぞれ陸海軍へ一斉に入営・入団していった。

[展示資料]

仮卒業証書 近藤清

1943年11月30日 近藤幸義氏所蔵

吉村友男書翰 宛先不明

1943年11月 わだつみのこえ記念館所蔵

「いよいよ、めでたく十二月一日、岐阜の歩兵聯隊へ入隊致すことになりました。御期待に背かぬやう、一生懸命、働いてまいる決心であります。では、全国民戦闘配置に着きつつある折から、ますますお元気で、心に太陽を持ち、くちびるに歌を持ってお働き下さいますやう、おいのりいたしてをります。 さようなら」

この画像は著作権の関係で表示できません。

四 軍事訓練

①陸軍に進んだ高木、柳田、吉村は12月1日に入営、高木は東部第六部隊（東京）、柳田は東部第六十三部隊（山梨）、吉村は中部第四部隊（岐阜）に配属となった。12月1日入営に際し、王子神社で見送りに来た人々を前に高木は、国土が戦場になる可能性があると言及し、周囲を驚かせた。翌44年2月、陸軍に進んだ3人はともに幹部候補生に採用され、5月高木と柳田は前橋陸軍予備士官学校へ、吉村は福知山の中部軍教育隊へ入った。

一方、海軍へ進んだ近藤と市島は、1943年12月10日に海兵団に入団、翌44年

2月1日、第十四期飛行専修予備学生としてともに土浦海軍航空隊へ配属、5月25日には市島は谷田部、近藤は出水の海軍航空隊へ転属となった。操縦専修の近藤と市島は、厳しい飛行作業を続けていた。

②戦局は一段と悪化した。1944年7月、サイパン島の日本軍が玉砕した。絶対国防圏が崩壊し、日本軍はフィリピンへの兵力集中をはかった。フィリピンがアメリカ軍に奪回されれば、日本と南方資源地域の海上輸送線が遮断され、日本の戦争遂行は絶望的になるからであった。前橋の高木と柳田は卒業を待たずに、550名の同期とともに第十四方面軍教育隊へ転属となり、吉村も南方派遣が決定した。いずれもフィリピン戦へ投入されたのである。

新谷照氏談（高木多嘉雄実妹）

両親とともに東部六部隊の兄に面会に行ったことがあります。兄はとんかつが好物だったため、母が帯の中にとんかつを隠して持って行き、差し入れていました。兄はそれを汲み取り式の便所の中で食べていました。そして便所の前では、父が立って見張っていました。

[展示資料]

吉村友男書翰 姉宛

1944年 わだつみのこえ記念館所蔵

「東京もこのごろは大へんだらう。空襲の用意はよいか。……」

では、現代唯ひとりの文化継承者よ、外界に負けず、一生懸命勉強してくれたまへ。今でも時々、夢殿の美しさが、ミロクのあのなめらかな微笑が僕の胸をよぎるのだ。また出す。」

新谷照氏談（高木多嘉雄実妹）

前橋陸軍予備士官学校を終える頃、成績のよかった兄に、陸軍中野学校への推薦の話がありました。しかし中野学校へ入校するには籍を抜かねばならず、高木家を守ることに強い意志をもっていた兄は、その入校を断ったと前橋への面会の際に告げられました。



出陣する柳田喜一郎と家族 於新宿駅頭
1943年11月30日 大学史資料センター所蔵
右から5人目が柳田喜一郎

五 戦場

①1944年10月18日、フィリピン西方海上、吉村の乗り込んでいた輸送船がアメリカ軍の魚雷攻撃を受け沈没した。レイテ島にアメリカ軍が上陸を開始する2日前のことだった。海へと沈む吉村の最期を知る手掛かりはない。

一方、高木と柳田は9月17日に前橋を出発、11月11日にマニラに入港したが、レイテ沖海戦の敗北で、すでに日本海軍の連合艦隊は壊滅し、食糧や弾薬の輸送も困難な状態に陥っていた。

翌45年1月アメリカ軍のリングエン上陸に伴い、日本軍はルソン島北部への転進を開始した。山岳地帯に兵力を集め、持久作戦を採ったのである。第十四方面軍教育隊も北部へと移動を開始、アメリカ軍が迫りくる2月、教育隊の卒業を機に高木は第十九師団（虎兵团）へ、柳田は第百三師団（駿兵团）に転属となった。

高木は第十九師団へ向かっていた。だが山岳地帯に陣を構える師団へ行くのに地図はなかった。食糧もほとんどなかった。キャンガンまで達した時、高木はアメリカ軍戦闘機による機銃掃射を受けた。3月30日のことだった。

柳田を待ち受けていたのは、サラクサク峠をめぐる攻防戦だった。アメリカ軍との激戦が続いた。柳田は機関銃小隊長として昼なお暗き密林地帯の溪谷を、磁石1個を頼りに戦った。4月10日戦闘の最中、柳田の頭部から顔面に銃弾が貫通した。



南方への出発を待つ前橋陸軍予備士官学校生 於福岡市
1944年9月下旬 新谷照氏寄贈 大学史資料センター所蔵
左端柳田喜一郎、左から3人目高木多嘉雄 高木も柳田も、ともにこの写真を東京の家族に送った。高木、柳田とも、生前の姿を写した最後の写真と見られる。

訓示 比島派遣第十四方面軍教育隊長 陸軍少佐 松野博
 比島派遣第十四方面軍教育隊第1回卒業式 1945年2月18日
 「本日茲に第十四方面軍教育隊第一回卒業式を挙行し、幹部候補生第十一期生諸子を国軍幹部として列するを得るは、本職のまことに欣快とする所である。……しかしながら今日この比島戦に於て、真に肝要にして効果を期し得るは肉攻、斬込み、築城の三戦法あるのみ。爆雷を抱き敵戦車の下に身を挺し、自らの犠牲と共に、敵戦車を破壊す。夜間、小部隊を以て敵陣を襲い、小火器、白兵をもって敵兵を殺傷す。或ひは時至るまで、熾烈なる敵の砲爆撃を避け堅忍持久を図るため周到なる築城をもって待機す。この戦法のみ、現下に於ける喫緊の要にして諸子は既にこの三戦法に充分なる習熟を卒えて居り、爾余の訓練は至らざるも不要と云うべし……」(『前橋陸軍予備士官学校戦記』)

② 1945年3月末、アメリカの機動部隊は沖縄諸島に猛攻撃を加え、4月1日、沖縄本島に上陸した。4月5日、航空兵力により沖縄周辺のアメ利カ軍に特攻攻撃を加える菊水作戦が発動された。

4月8日、休暇で岐阜へ帰った近藤清は、岐阜商野球部を育てた遠藤健三を訪ね、無言のまま二人で長良川を歩いた。実家に帰り、母や姉らと短い時を過ごし、最後の写真を撮った。名古屋航空隊から第二国分基地へ移り、出撃直前、早稲田の学費を支弁していた姉に宛て遺書を書いた。そして4月28日沖縄へと出撃した。

この日、菊水作戦を指揮する宇垣纏第五航空艦隊司令長官は、日記に次のように書いた。

「特攻も其の成果下火なるが如し。」

翌29日、市島保男が鹿屋基地から出撃した。市島は4月21日に谷田部航空隊を立ち、鹿屋基地に着いてから出撃するまでの日々を日記に綴った。日記の末尾には、聖書の言葉が残されていた。

「人若し我に従はんと思はゞ己れを捨て己が十字架を負ひて我に従へ」(マタイ伝16章24節)

市島が最後に発した言葉は、「敵艦見ユ」(17時4分)、「我敵艦ニ必中突入中」(17時9分)の無電だった。

敗戦まで100日余りのことだった。

柳田喜一郎がどのような学生時代を送ったのか、わからない。今に残る彼の遺品は、前橋陸軍予備士官学校時代のアルバム、唯一冊だけである。その末尾

には、墨痕鮮やかに次の言葉が記されている。

「憧れの南の国へ 美しき夢を懐いて 懐しの故国を去る
 さらば父母よ 友よ 幸福あれ

喜一郎」

2013年3月現在、早稲田大学の戦没者は4736名を数える*。うち学徒出陣以降の学徒の戦没者数は500名を超えると推定される。そして全戦没者の7割近くが、実に1944年以降に集中する。

*『早稲田大学百年史』第四巻(1992年)、および『早稲田学報』2005年2・3月号、2008年8月号までに掲載された、「早稲田大学戦争犠牲者名簿」による。本名簿の記載法は、教職員(元を含む)、校友(中退者および工手学校・高等工学校卒業生を含む)、在学生のうち、満州事変以降の戦没者を範囲とする。戦没者とは、旧陸海軍人の戦死・戦傷死・戦病死・不慮死・病死・事故死・殉職死、および非戦闘員の戦災死を指す。

[展示資料]

中部軍教育隊書翰 吉村彦七宛

1944年12月22日(消印) わだつみのこえ記念館所蔵

吉村彦七は息子友男が今、どの部隊にいるのか、中部軍教育隊に問い合わせた。教育隊からの返信の書面には所属部隊名などとともに、南方方面軍の郵便は戦局の関係上途中停滞し、未着のこともあると記されていた。しかしこの書面を父が手にした時、すでに友男は戦死していた。

日章旗

近藤幸義氏所蔵

近藤清に贈られた日章旗。双葉山、羽黒山といった横綱をはじめ、当時の人気力士の名が見える。

この画像は著作権の関係で表示できません。

近藤清書翰 野村少尉他一同宛

1945年4月 近藤幸義氏所蔵

「出発の折は心からの御見送り戴き感謝に堪えず。熱誠なる諸兄の御激励にも応へ得ず、不覚にも我等は未だ生きのびて居るが、闘志満々時機到来を待ってゐる。『明日ハ出撃』と言ふ日が何度も続けど、その場になって取止められ、元気のはけ口に困る位だ。……」

馬越千鶴氏（市島保男実妹）談

1945年3月1日、外出許可された兄が突然、川崎の実家に戻ってまいりました。母と弟はすでに群馬に疎開しており、父は仕事で外出しておりました。兄は私に、「両親と弟に会わせて欲しいな」と申しました。そして3月12日、両親と弟が土浦へ行き、兄と面会いたしました。この写真はその時に撮ったものです。兄は最後まで、両親をはじめ家族には、自分が特攻隊員だということを語りませんでした。しかし人に託して両親の許に手渡された「最後の日記」には、克明にいろいろな思いが綴られています。



市島保男と家族 於土浦
1945年3月12日 馬越千鶴氏所蔵
左から市島保男、父、弟、母

マフラー 市島保男着用

馬越千鶴氏所蔵

市島保男は飛行用マフラー（白羽重・大幅八尺）が手に入るようであれば送ってほしいと両親に手紙を出した（1944年10月18日付）。すぐに用意し谷田部に送った母へ、市島は礼状を出した。「マフラわざわざ着物の裏を取って下さった由、誠に恐縮でその様な事迄なされる必要はありませんでしたが、有難く頂いて置きます。（マフラは防寒、火災の時の防火、防塵、傷の応急処置、見張をしやすくする等々の為必要なさうです）」（1944年11月3日付）



特攻機上の市島保男 馬越千鶴氏所蔵

市島保男「日記」

馬越千鶴氏所蔵

1945年4月21日から29日までの日記。

鹿屋基地での日々が特攻出撃直前まで綴られている。

レンゲの花

馬越千鶴氏所蔵

特攻出撃直前の1945年4月24日、市島保男が鹿屋基地付近で摘んだレンゲの花。

市島はその日の日記に、次のように記している。

「敵機動部隊未だ見えず。十一時より二時間待期。チャートにコースを入れたり、符号を調べたりし、何時でも出撃出来る準備をなす。只命を待つだけの軽い気持である。隣の室で『誰か故郷を思はざる』をオルガンで弾いてゐる者がある。平和な南国の雰囲気である。徒然なるまゝ、にれんげ摘みに出掛たが、今は捧げる人もなし。梨の花と共に包み、僅かに思出を偲ぶ。……」

1943年度臨時徴兵検査判定結果一覧 早稲田大学

		A 11/30現在 在籍者	B 入営者 ¹⁾	C 応召者 ²⁾	D 小計(B+C)	E 不合格者	F 計(D+E)
学部	政治経済	1,179	764	137	901	22	923
	法	800	558	144	702	32	734
	文	711	384	3	387	67	454
	商	1,427	1,050	128	1,178	5	1,183
	理工 ³⁾	1,287	750	167	917	13	930
学院	第一	-	-	-	-	-	-
	第二	1,364	206	61	267	2	269
専門部	政治経済科	1,214	315	38	353	4	357
	法律科	1,014	268	43	311	34	345
	商科	1,203	228	18	246	0	246
	工科 ³⁾	847	203	35	238	2	240
高等師範部		380	146	16	162	12	174
早稲田専門学校		1,980	549	68	617	14	631
高等工学校・工手学校		-	-	-	-	-	-
計		13,406	5,421	858	6,279 ⁴⁾	207	6,486

*表中「-」はデータなし

注 1) 甲種・第一乙種・第二乙種

2) 第三乙種・丙種

3) 徴集延期

4) 理工学部および専門部工科入営延期のため、実際は5,124

出典：大学史資料センター所蔵「本部書類（続）」のうち、No.16『昭和18年4月起 文部省関係書類 教務課（昭和18年度）』より